

即興演奏による感情コミュニケーションに おける聴取者の自閉症傾向の影響¹

生駒 忍・菊地 正
(筑波大学 人間総合科学研究科)

我々は、非言語的な手段を用いても感情のコミュニケーションを行うことができる。その一つとして、即興演奏を通しての非言語的感情コミュニケーションがあり、音楽療法場面において古くから用いられている。

ことばに依拠しないこの手法は幅広く多様な問題に対して適用されてきており、その対象には失語症や場面緘黙などの他、自閉症も含まれる。自閉症の特徴である言語の障害に着目すると、このようなアプローチはその制約に頑健であることから極めて有意義であると考えられる。しかし一方で、自閉症の特徴としてはコミュニケーションの障害もまたあり、他者の感情や意図を理解することに困難を示すことが知られている。その点を考えると、このような手法が実際にどれだけ効果を上げるのかについては不透明な側面があり、実証的な検討が求められるといえる。

そこで本研究では、即興演奏による感情の非言語的コミュニケーションの成立に、自閉症傾向が影響を与えるのかどうかについて検討を行う。なお、実験において適切な統制を確保しやすいよう、対象者は一般大学生とし、自閉症スペクトラム仮説に基づく非臨床アナログ研究としての形態をとる。非臨床アナログ研究とは、技術的・倫理的な制約から信頼性のあるデータの収集しにくい臨床レベルの問題を抱える人々について、非臨床群におけるその問題の個人差に着目した知見から類推する研究手法である。近年の研究は、自閉

症者と健常者との間には連続性があると考えられることを明らかにしている。よって、抑うつなどと同様に、非臨床アナログ研究が成立し有効な知見をもたらさうな研究対象であるといえる。

方法

実験参加者：聴取者として一般大学の大学生40名が参加した。

材料：演奏者は、聴取者とは別の一般大学生12名であった。「喜び」「悲しみ」「怒り」「恐怖」の計4感情を、電子ドラムの即興演奏で表現するよう求めた。楽器はCASIO LD-80、音色はスネアドラムとし、MIDI形式で録音された。演奏時間は20sずつとし、演奏を求める感情の指定順は演奏者ごとにランダムとした。

聴取者の自閉症傾向を測定する質問紙として、若林・東條・Baron-Cohen・Wheelwright(2004)の自閉症スペクトラム指数(AQ)日本語版を用いた。全50項目からなり、意図の読み取り、社交性、注意特性、こだわりなど自閉症(特に高機能タイプ)に関連する諸特徴を包括的に取り上げられており、自身に当てはまる程度を評定させる。自閉症スペクトラム仮説に基づき非臨床群における自閉症傾向を測定する自記式尺度として広く用いられているものである。

手続き：得られた計48刺激(4感情×演奏者12名)を提示し、4つの感情のうちどれを表現したのか4肢選択式で回答させた。提示順は聴取者ごとにランダムとした。全試行終了後、AQ

¹ 本研究は日本学術振興会21世紀COEプログラム「こころを解明する感性科学の推進」の補助を受けた。データ収集にあたっては、樋口真理子・別役透・山田圭介(筑波大学)の各氏にご助力をいただいた。

への回答を求めた。

結果

AQ得点を若林ら(2004)の原法に基づき算出し、中央値に基づきAQ高群21名・低群19名の2群に分け分析を行った。なお、AQへの回答を4件法のまま単純集計して2群を設定した場合にも分析結果は同様であり、以降には原法に基づく結果を報告する。

Fig.1に各感情の正判断率を示した。2要因分散分析を行ったところ、感情種の主効果が有意であり($F(3, 114) = 60.40, p < .0001$)、自閉症傾向の主効果、および交互作用はいずれも認められなかった($F(1, 38) = .97; F(3, 114) = 1.80, ns$)。

総正判断率とAQ得点との積率相関係数を求めたところ、 $r = .054$ でありほぼ無相関であった。

考察

本研究では、即興演奏による感情コミュニケーションにおいて聴取者の自閉症傾向の影響がみられるかを検討した。分析の結果、自閉症傾向はこのようなコミュニケーションの成否をほとんど左右しないことが示された。

よって、自閉症傾向はこのような感情コミュニケーションには影響しにくいといえる。これは、単に自閉症児・者を対象とした音楽療法実践においてもコミュニケーションが成立しようというだけでなく、そうでない対象者との場合と大差ないレベルで行えることを示唆していると考えられる。自閉症児・者への即興演奏を通しての音楽療法的アプローチは、言語の障害からのみならず、コミュニケーションの障害からも制約を受けない優れた手法であることがうかがえ興味深い。

近年、自閉症児・者における顔の表情認知についての知見が蓄積され、表情からの基本感情の検出は必ずしも困難であるとは限らないが、そこには健常者とは異なる非定型的な方略が関与していることが一貫して指摘されている(神尾・齊藤・井口, 2006)。本研究において、課題成績の

面では自閉症傾向の影響が認められないという結果となったが、そこで用いられた方略が同一であるかどうかはなお不明である。今後、この点について検討を行うことで、自閉症の特異な認知特性についてのさらなる解明が進むことが期待される。また、そういった感情判断の方略が明らかになれば、自閉症における感情情報の処理能力を改善させる教育プログラムを体系化することも可能となるだろう。

また、本研究ではコミュニケーションの受け手の自閉症傾向のみに注目したが、音楽療法場面では双方向的なコミュニケーションが行われることも多く、よって送り手についての検討も有意義であると考えられる。ただし、安定した知見を得るためには演奏者数を増やす必要があり聴取者への負担も増すこと、自閉症自体だけではなく自閉症と併存しやすい協調運動の困難性も楽器演奏の質に影響するおそれがあることなどもあり、実験計画に相応の工夫が必要になることに留意する必要があるだろう。

引用文献

神尾陽子・齊藤崇子・井口英子 (2006). 児童青年精神医学とその近接領域, 47, 16-28.
 若林明雄・東條吉邦・Simon Baron-Cohen・Sally Wheelwright (2004). 心理学研究, 75, 78-84.

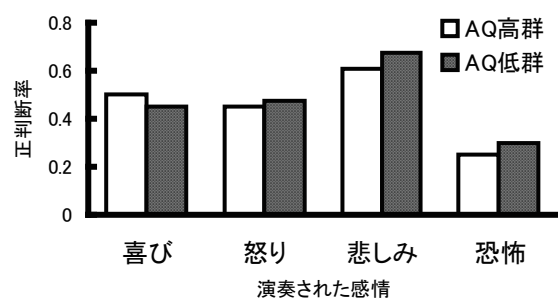


Figure 1 自閉症スペクトラム指数 (AQ) 高群・低群における各感情の正判断率

(IKOMA Shinobu & KIKUCHI Tadashi)